

浦和アトリエ村、奥瀬アトリエに関する研究

ー 落合アトリエ建築との比較とともに ー

Keywords

浦和 アトリエ村 目白文化村
落合 歴史的建造物 文化財的価値

1. はじめに

1.1 研究背景・目的

大正末期から浦和の鹿島台付近に多くの画家が集い、「アトリエ村」というものが存在した。また、「鎌倉文士と浦和画家」といった言葉は、関東大震災前は田端が作家・画家がいた文化村とされていたが、関東大震災後、文人は鎌倉へ画家は浦和へ集ったということからきた言葉である。今回、取り上げている奥瀬アトリエは浦和画家のうちの一人、奥瀬英三が西洋画を中心に芸術活動を行っていたアトリエである。奥瀬アトリエの設計者は富永襄吉、施工は1930年(昭和5)から1931年(昭和6)初めに下地熊次郎によって行われたことが、現当主が保管していた青焼き図面、手紙、領収書などからわかっている。現在も現当主の方々により良好な状態が保たれている。

本研究では「アトリエ村」の成り立ちについて調査を進め、戦前期の浦和の変遷について追及していく。また、奥瀬アトリエを好例とし、アトリエ村との関係性を見い出す。その際に「アトリエ村」と類似した落合にあった「目白文化村」やアトリエ建築との比較を行い、奥瀬アトリエの文化財的価値を検討していく。

1.2 研究方法

- (1) アトリエ村に関する歴史的文献、絵図を調べ、戦前期の浦和の変遷について追求する。
- (2) 奥瀬アトリエの実測調査、文献調査を行う。また、歴史的文献や実測図面、青焼き図面を元に復原・考察する。
- (3) 落合に現存する複数のアトリエ建築の見学、調査を行い、大正から昭和戦前期のアトリエ建築の共通点、相違点を明らかにする。
- (4) 奥瀬アトリエと(3)で行った研究のアトリエ建築の比較をし、奥瀬アトリエの歴史的価値を検討する。

1.3 実測調査 — 奥瀬アトリエ —

調査日：2015年12月14日

所在地：埼玉県さいたま市浦和高砂4-19-12

2. アトリエ村の誕生

1923年(大正12)に起きた関東大震災後、浦和は県庁所在地でありながら落ち着いた雰囲気を残し、別荘地や住宅地として注目されていた。それも関東大震災前に県内



AK13054 塩川 遥香

主都市の土地区画整理を始め、市街地中心部に広がる網目状の街区が整備完了していたため被害が少なかった。その結果、東京、横浜で被災した人々が強固な台地上に広がり、移住する人が出てきた。

1931年(昭和6)8月18日付の東京日日新聞・埼玉版に「浦和町鹿島台こゝ文明の郊外は四十有余名のアルチストがさながら画描き村を現出している」と記載されていたことから鹿島台に40名以上の画家が移住していることがわかる。また、表1にも示すように、東京(美術のメッカである上野)に近く、閑静な浦和にアトリエを求めて被災した画家が多く移住し、アトリエを構えていたことから浦和アトリエ村が誕生した。

表1 画家と浦和の関係

画家名	浦和との関係
小林真二	大正12年、関東大震災により浦和に移住
跡見泰	大正13年、浦和町鹿島台へ移住
相馬基一	大正13年、浦和町に移住しアトリエ建設
武内鶴之助	大正13年、浦和町に移住
奥瀬英三	昭和6年、浦和町に移住しアトリエ建設
須田剋太	昭和6年、別所沼畔に移住しアトリエ建設
寺内萬治郎	昭和9年、田端から浦和市針ヶ谷にアトリエ建設
里見明正	?年、別所沼畔にアトリエを建設
林倭衛	昭和16年、別所沼畔の稲荷台にアトリエを建設



図1 昭和5年 浦和画家の住居配置地図

3. 奥瀬アトリエ

3.1 奥瀬英三について

奥瀬英三は、1891年(明治24)三重県上野市に生まれ、1912年(明治45)太平洋画会研究所に入所し、約5年間の研修をした。84歳で亡くなるまで西洋画を中心に芸術活動を展開した日本近代における著名な西洋画家、浦和画家の一人である。

3.2 設計者、富永襄吉について

「浦和鹿島台に建る奥瀬英三氏のアトリエ建築について」の論文より、富永氏は1893年(明治26)に生まれ、1916年(大正5)にアメリカオレゴン大学を卒業し、その後マッキンミードアンドホワイト事務所に勤務している。帰国後、1940年(昭和15)に建築設計事務所を開設した。昭和5年前後は、アメリカ在住のため一時的に日本に帰国したようだが、奥瀬の設計依頼の過程は不明である。

3.3 内装

内装は玄関から応接間にかけて中国風な意匠の内装であった。また、アトリエに存在する自邸を描いた油絵から推測する限り、アトリエも中国風の意匠であったことが伺える。他の部屋は和室の意匠であることから、中国風の内装は奥瀬英三の趣味や思考が大きく影響していると考えられる。また、現当主によると応接室の壁面にはめ込まれたオブジェクトや玄関のステンドグラスは奥瀬英三が収集したものであることがわかっており、細かなデザインに対しても考慮されていたことが推測できる。

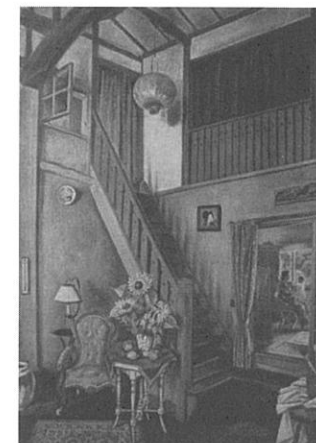


写真1 自邸 油絵

3.4 青焼き図面と実測図面の比較

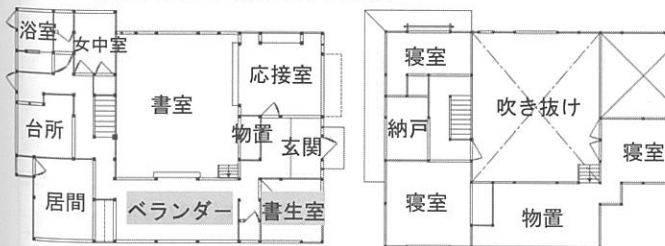


図2 青焼き図 1階平面図

図3 青焼き図 2階平面図

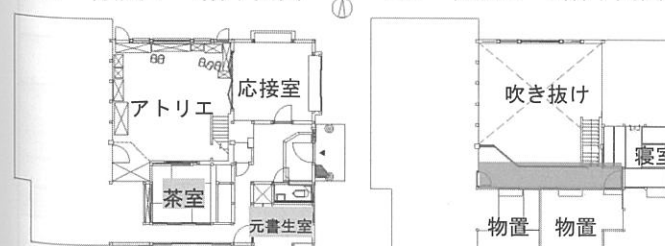


図4 実測図 1階平面図

図5 実測図 2階平面図

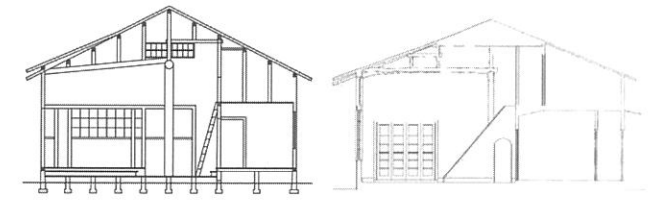


図6 青焼き図 断面図

図7 実測図面 断面図

青焼き図面と現状を比較し読み取れることは、

- ①ベランダが茶室へと置き換わっている
- ②2階の張り出した通路に合わせた階段と2階の変化
- ③戦後に増設されたと思われる祖母の家への通路を作るため、書生室が改造される

4. 落合

4.1 目白文化村(落合文士村)

1922年(大正11)~1925年(大正14)にかけて箱根土地株式会社によって、田畑や山林が開墾され、高級分譲住宅地「目白文化村」が売り出された。1922年(大正11)頃から中流の上ぐらいの官吏やサラリーマン、学者、作家、画家たちが外観は西洋風で、中身は和洋折衷の住宅を続々と建て始めた。地盤が固い武蔵野台地上に建設されたので、浦和と同じように関東大震災の影響はほとんど受けていない。現在では、目白文化村の中心部はほとんどが戦災焼失している。

4.2 落合のアトリエ建築

落合に現存する、または記録に残されているアトリエ建築として旧中村葬アトリエ、旧佐伯祐三アトリエ、旧刑部人アトリエ、旧島津一郎アトリエの4棟を挙げる。

- (1) 旧中村葬アトリエ
- (2) 旧佐伯祐三アトリエ
- (3) 旧島津一郎アトリエ (国登録有形文化財に登録)
- (4) 旧刑部人アトリエ (平成18年に解体された)



図8 落合のアトリエ建築 配置地図

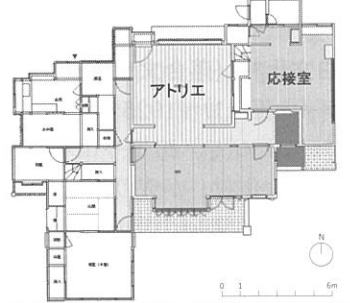
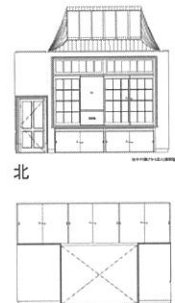
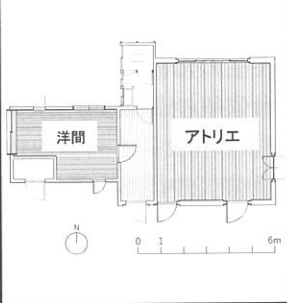
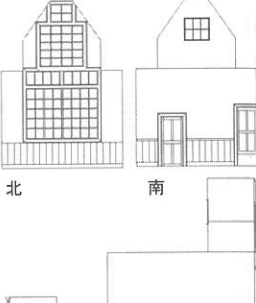
(1) 旧中村彝アトリエ

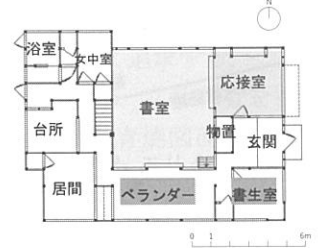
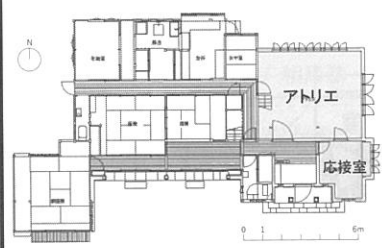
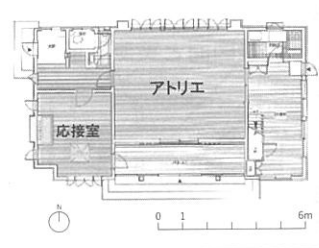
中村彝は、1916年（大正5）8月20日に東京府豊多摩郡落合村下落合464番地にアトリエを新築した。中村彝は体が弱く、あまり外出出来なかったことから友人の親戚である岡崎キイの世話を受け、アトリエで作品の制作を続けた。女中室は岡崎キイの部屋であったと考えられる。アトリエには中村彝の全世界があったといっても過言ではなく、内装や家具・調度品などは、彼の作品に重要なモチーフとして描かれている。

(2) 旧佐伯祐三アトリエ

佐伯祐三は、1920年（大正9）に池田米子と結婚をし、その1年後に東京府豊多摩郡落合村字下落合661番地にアトリエ付きの家が完成する。佐伯祐三は近所に住む曾宮一念と知り合い、彼を通じて中村彝に私淑する。佐伯祐三はパリや日本を行き来することになるが、1926年（大正15）日本帰国時、自宅付近の風景をモチーフに“下落合風景”の連作に取り組んだ。和館と洋風のアトリエといった異なる2つの趣向を共存している。

表2 アトリエ一覧

アトリエ名	旧中村彝(なかむらつね)アトリエ	アトリエ展開図	旧佐伯祐三アトリエ	アトリエ展開図・立面図
図面				
竣工	大正5年(1916)		大正10年(1921)	
設計	不明		不明	
施工	不明		不明	
構造	木造平屋建		洋館…木造平屋建 和館…木造二階建(現存せず)	
アトリエの大きさ (縦×横)	約3間×3間 (5360×5360)(約20畳)		約3間×約2.4間 (5181×4321)	
配置方角	北		北	
附属室	応接室、女中室		洋間、屋根裏部屋	
その他	ベルギーから取り寄せた 岡崎キイによる世話を受けていた		和館と洋館のアトリエ 南京下見板張りの外壁 急勾配の屋根	

アトリエ名	奥瀬英三アトリエ	旧刑部人(おさかべじん)アトリエ	旧島津一郎アトリエ
図面			
竣工	昭和5年(1930)	昭和6年(1931)	昭和7年(1932)以前
設計	富永襄吉 (青焼図面、工費請求書認定証ほかによる)	吉武東里	吉武東里
施工	下地熊次郎 (工事費領収証による)	大工・高橋清次郎	不明
構造	木造2階建 切妻造 瓦葺	木造平屋建 洋館アトリエ棟と和館居住棟	木造平屋建、一部中二階
アトリエの大きさ (縦×横)	3.5間×3間	3間×3.5間 (5460×6370)	約3間×3間 (5400×5400)
配置方角	北	北	北
附属室	応接室、物置、女中室、書生室、ベランダ	応接室、中二階廊下、女中室	応接室、中二階部屋、下書斎、バルコニー
その他	大型作品の搬入用の高さ2.4m の開口部、 物置に腰までの手すり設置	洋館:スパニッシュ様式の外観 和館:屋根瓦をオレンジ色のスペイン 瓦縁側に円柱	平成24年国登録有形文化財に登録 スパニッシュ様式、画室機能のみの建物

(3) 旧島津一郎アトリエ

旧島津一郎アトリエは、島津製作所三代目新津源吉の長男であり洋画家でもある島津一郎のアトリエとして建設された。設計者は国会議事堂の設計に携わった吉武東里である。アトリエが所在する中井は、東京大空襲による被害が大きかった旧目白文化村界隈にあり、島津源吉は当時この辺りに一万坪の広大な土地を所有していた。

(4) 旧刑部人アトリエ

刑部人は1924年（大正13）に東京美術学校に入学し、後輩に府立一中の同窓生で島津一郎がいた。美校秀才の刑部は島津一郎の妹鈴子の夫君に見込まれ、1931年（昭和6）に結婚する。そのような繋がりから島津邸内にアトリエ付属の新居を構えた。設計者は旧島津一郎アトリエと同じく吉武東里である。和風母屋とスパニッシュ風アトリエといった異なる2つの趣向を共存させている。

5. 奥瀬アトリエと落合アトリエ建築の比較

表2より全てのアトリエの共通点は、以下の3点だ。

- ① アトリエの大きさは約3～3.5間×約2.4～3.5間（約20畳）であり、正方形または長方形の形をしていた
- ② アトリエの附属室に接室が設置されている
- ③ 北側採光である

以上3点は全ての共通点であることから日本の大正から昭和戦前期に見られるアトリエの傾向といえるのではないか。アトリエの大きさとして作業場、自分が描いたキャンパスの収納をする上で約20畳の大きさは必要だったと推測する。アトリエの附属室に共通する接室は、お客様や生徒を招いたり、肖像画を描いたりする上で必要不可欠な空間であるといえる。北側採光は、絵を描く上で季節や時間帯に問わず安定した光を得ることが可能であり、天窓が設置出来ることから好条件である。また、作品を観察する場として中二階を設置していることが昭和時期のアトリエから見られるようになる。

相違点は、旧中村彝アトリエと奥瀬アトリエはアトリエを中心に構えた“アトリエ式住宅”である。他のものは“中廊下式住宅”と似た構成であった。また、奥瀬アトリエと旧島津一郎・旧刑部人アトリエは、留学経験のある富永襄吉、吉武東里が設計をし、作りや意匠が特徴的である。

明治時代は思考やデザインをイギリス、ドイツ、フランスのヨーロッパ三カ国の建築の習得にあった。1900年以降から見られたアールヌーヴォーの発祥地はベルギーであり、日本では新しい装飾のスタイルを一つ加える結果となっていた。旧中村彝アトリエのベルギーから取り寄せた赤瓦は周囲の住宅からも目立った存在であったようだ。また、旧佐伯祐三アトリエの特長である南京下見板張りは別名イギリス下見とも呼ばれている。大正末から昭和初期にかけてアメリカンボザールや大正11年にアメリカから伝わった日本のスパニッシュ様式（田園的な

飾らない姿や素朴な味わい、モダニズムの形に近い）が浸透し始める。数多くの建築家がアメリカに渡り、影響を受けたが、富永襄吉・吉武東里もそのうちの1人であろう。落合は田園地帯だったことからスパニッシュ様式をより反映させやすかったのだろう。

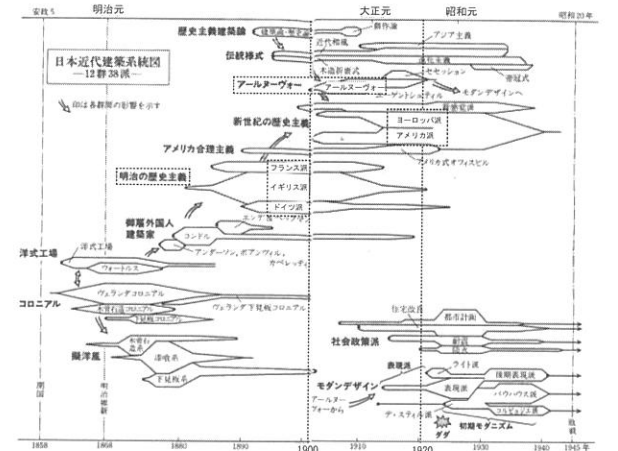


図9 日本近代建築系統図

6. まとめ

奥瀬アトリエは設計者の富永襄吉がマッキミードアンドホワイト事務所に勤務していた経験があり、施主の奥瀬英三は朝鮮旅行や従軍画家の経験があることから設計者や施主の意向や知識が反映されたアトリエであると推測する。しかし、富永襄吉に関する詳しい情報や奥瀬英三との関係性等、判っていないのが今後の課題である。落合アトリエと比較をした結果、大正から昭和戦前期に見られるアトリエの傾向を兼ね備え、作りや内装も特徴的で中二階の設置に初期段階で取り組んだ事例でもあり、十分に歴史的価値の高い建築物であることが証明出来る。また、欧米から日本に伝えられた様式は邸宅を中心に受け入れられてきたが、アトリエにも反映されていたことがわかった。

参考文献

- 1) 『浦和市史 第四巻 近代史料編Ⅱ』昭和54年 p.471
- 2) 『浦和市史 通史編Ⅳ』平成13 p.341
- 3) 『浦和市史 現代史料編Ⅰ』平成11 p.777
- 4) 「浦和鹿島台に遺る奥瀬英三氏のアトリエ建築について」窪田美穂子、安野彰、渡邊愛 日本建築学会大会学術講演梗概集 2002.8
- 5) 目白文化村の造成 <http://chinchiko.blog.so-net.ne.jp/2004-12-08>
- 6) 『埼玉の画家たち』著者水野隆、平成12年7月10日 第1印発行
- 7) 「戦前期の浦和における宅地化の進歩とアトリエ村の形成」安野彰、渡邊愛、窪田美穂子 学術講演梗概集、計画系 2002.6
- 8) 落合の追憶 新宿区地域文化部文化観光課 平成28年3月発行
- 9) 「旧島津一郎アトリエ実測調査報告書」早稲田大学 建築史研究室 平成22年3月
- 10) 『刑部人展』昭和と日本紀行 発行：栃木県立美術館 ©2004
- 11、12) 新宿区立中村彝アトリエ記念館、佐伯祐三アトリエ記念館
- 13) 『奥瀬文庫目録』東京都美術館 昭和60年
- 14) 日本近代建築（下）— 大正・昭和篇 — 岩場新書